

瓔珞みがく

(大正九年桜星会歌)

佐藤一雄君 作歌
置塩寄君 作曲

一

瓔珞みがく石狩の
みなもととほ

源遠く訪ひくれば

原始の森は闇くして

雪解の泉玉と湧く

二

浜茄子紅き磯辺にも

鈴蘭薫る谷間にも

愛奴の姿薄れゆく

蝦夷の昔を懐ふかな

三

今円山の桜花

歴史は旧りて四十年

我が学び舎の先人が

建てし功はいや栄ゆ

四

その絢爛の花霞

憧憬れ集ふ四百の

健児が希望深ければ

北斗に強き黙示あり

五

醜雲消えて人の世に

陽光はうららかに輝けど

風の名残のつきやらで

狂瀾さわぐ今し今

六

潮に暮るる西の空

月も凍らむシベリアの

吾が皇軍を思ひては

猛けき心の躍らずや

七

白銀狂ふ埋れ路も

踏みて拓かむわが前途

はろけき牧場に嘯けば

雲影はやし草の波

八

想を秘めし若人が

唇かたくほほゑみつ

仰げば高く聳え立つ

羊蹄山に雪潔し